

歩いても 歩いても

2008(平成20)年4月9日鑑賞〈東映試写室〉

★★★★



監督・原作・脚本・編集＝是枝裕和／出演＝阿部寛／夏川結衣／YOU／高橋和也／田中祥平／野本ほたる／林凌雅／寺島進／加藤治子／樹木希林／原田芳雄（シネカノン配給／2008年日本映画／114分）

……是枝裕和監督が、小津安二郎、成瀬巳喜男監督ばりの（？）古き良き時代を彷彿させる家族劇に挑戦！ 思わずそう形容したくなる、今ドキ珍しい静かな夏の1日の家族を描いた映画がコレ！ 今は失われたが、私たちが体験したはずのあんな風景、こんな交流が次々と。問題は、そこから何を感じ、何を学ぶかだが……。

🎬今ドキ珍しい家族映画が、是枝裕和監督の手で！

今やハリウッドでも日本でも、何か映画にできるような面白いネタはないかと血まなこになって探しているのが実情。そんな中、監督4作目の『誰も知らない(Nobody knows)』（04年）が大きな反響を呼んだ是枝裕和監督は、第5作『花よりもなほ』（05年）でV6の岡田准一を起用してくだらない時代劇に挑戦した（『シネマルーム11』128頁参照）が、私に言わせれば、それは大失敗……？

しかし、それから4年後。是枝監督は、まるで数十年前の小津安二郎監督作品や成瀬巳喜男監督作品に回帰するかのような、純日本的な家族劇に挑戦。「横山家のある夏の1日」とも言うべきこの静かな家庭劇は、何のミステリー性も何のドラマ性もない淡々とした横山家の1日を描いているだけだから、ホントに今ドキ珍しい映画だが、なぜかそれがかえって新鮮！

🎬どこかで体験した、あの風景が……

松山市で生まれ育った団塊世代の私の父親の兄弟姉妹は7人、また母親は2人姉妹。したがって、松山市内にあった父親方も、郡中という郊外にある母親方も、私が子供

の頃は、法事やお盆、お正月、春休み、夏休みには、祖父母の家にも出入りしていたことを今でもよく覚えている。また、弁護士になって結婚した後も、毎年1月2日には妻の実家である堺市内の両親の家に親戚一同が集まり、楽しいひとときを過ごすという習慣が数年間続いた。このように、私たちの世代を含めた多くの日本人は、自分と両親そして祖父母という3世代の家族が、お正月とお盆、法事などの際に祖父母宅に集まり、共通の時間を過ごすという経験をもっているはず。もっともそれは、この映画における横山家にみられるように、いつも楽しい時間であるはずはなく、時には苦痛を伴うケースもあるようだ。今、横山良多（阿部寛）とその妻ゆかり（夏川結衣）、そしてなぜか父親のことを「良ちゃん」と呼んでいる10歳の男の子あつし（田中祥平）は電車に乗って良多の実家に向かっているようだが、良多は「泊まる」と約束したことを何とか撤回できないかとゆかりに相談しているくらいだから、あまり実家に長居をしたくないよう。さて、その理由は……？ この映画はミステリー仕立てでも何でもないので、スクリーンに目を向けていれば自然に横山家の人間模様がわかってくるから、あまり身構えずに自然体で観ていこう……。

横山家では、おばあちゃんが張り切り！

映画の冒頭、樹木希林扮するとし子と、2人の会話から明らかにその娘だとわかるYOU扮する片岡ちなみが、一緒に野菜の皮むきをしているシーンが登場する。私の私にはよくわからないが、これは3つの世代が集まる席ではよくある風景。そして、横山家では料理の得意なとし子がいつも主役になるようだ。それに対して、横山医院の院長であり、今は引退している夫の恭平（原田芳雄）のカゲが薄いのは、お医者サマとしての社会的地位はあっても、引退した今となっては家族との気の利いた会話もロクにできないため……？ もっとも、これは横山家固有の家族関係、力関係によるものであり、その姿は家族によってさまざま。ちなみに坂和家では、3つの世代が集まる時、横山家とは全く異なる風景が展開されるが、それはこの際省略し、とし子の得意料理であるトウモロコシのかき揚げを中心とした料理談義と、良多たちが小さかった頃の昔話に注目しよう！

片岡ちなみの計算は……？

ちなみは今日、夫信夫（高橋和也）とさつき（野本ほたる）、睦（林凌雅）という

2人の子供と一緒に実家に戻っているが、会話の中で少しずつわかってくるのは、ちなみには両親の世話をしなければならないという娘としての義務感と、旧横山医院の建物を改造して2世帯住宅として両親と一緒に住みたいという思惑があるらしいこと。今年弁護士生活35周年を迎える私は、そんな論点を含む相続問題の処理をたくさん経験してきたが、イザもめ始めると大変なことになるのが常……。もともと、ちなみの夫信夫は自動車営業マンだから、こんな田舎に家族と共に引っ越してきたら何もすることがなくなってしまうから大変だろうが、どうも片岡家はちなみが実権を握っているよう……？

どこでも、次男は親に反発するもの……？

男兄弟が2人いると、両親がまず長男に期待するのは当然。しかも、横山恭平はお医者サマだから、恭平が長男の純平に「横山医院の跡継ぎを」と期待したのは当然。そして、現に純平は優秀だったらしい。するとそんな場合、次男は親に反発し、「僕は医者なんかにならない」と言い出すもの。そして、現に良多がそうだったらしい。

ところが、是枝監督が自ら原作と脚本を書いたこの映画では、長男の純平が海で溺れている少年を救助した際、少年は無事救助できたものの、純平が死亡してしまったらしい。なるほど、今日実家にちなみ夫婦や良多夫婦が集まってきているのは、純平の命日だから……。

あんな、くだらん奴のために……？

恭平に言わせれば、優秀だった純平が「あんなくだらん奴のために」命を落とさなければ、立派に横山医院を継いでくれていたはず……。まあ、世の中の父親は概して長男に対してそんな期待と評価をするものだが、それを知った次男は概ね反発するもの。横山家もその例にもれず、今良多が絵画修復士として中途半端な仕事しかできていないのはそのせい……？ しかし、良多が考えるに、それって何が悪いの？ そんな話がエスカレートしていくと、「医者がそんなに偉いんですか」と良多が声を荒らげ、昔からの横山家お決まりの論争になってしまうよう……？

ちなみに、映画には今井良雄という体重100キログラム超の若者が登場するが、彼は純平の命日にのみ毎年1回お参りにきている若者。つまり、純平は、こんなくだらない男を海の中から救助するために命を落としてしまったわけだ。そんな今井良雄に

対する恭平やとし子の思いは……？ 今井に対して「来年もまた来て下さいネ」というキレイごとの言葉のウラに潜む、とし子の腹のウチを聞いていると、私は思わず女の恐さにぞっとしてしまっただが……。

あの1曲は1969年の大ヒット曲！

私が大阪大学に入学したのは1967年4月。去る4月8日、私が監査役を務めている株式会社オービックの40周年記念パーティーが東京の帝国ホテルで盛大に開催されたが、オービックの社長（会長）が奥さんと共に大阪市西区の小さな事務所で会計機を扱う会社を立ち上げたのが1968年4月。私が阪大へ入学した翌年のことだ。

1967年の大きな政治闘争のテーマは、佐藤訪米阻止やアメリカの原子力空母エンタープライズ号の佐世保寄港阻止だったが、その頃私が毎晩聴いていたラジオ番組がABCヤングリクエスト。そして、当時の大ヒット曲が伊東ゆかりの『小指の思い出』や黛ジュンの『恋のハレルヤ』そしていしだあゆみの『ブルーライト・ヨコハマ』など。しかして、この映画ではいしだあゆみが21歳の時に歌った当時150万枚の大ヒットとなったこの曲を、なぜかおばあちゃんがもっているSPレコードによって聴くことに。なぜおばあちゃんはこの曲にこだわりを……？ その真相やいかん……？

近所づきあいにも、昔みた風景が！

私は2001年4月以降西天満3丁目に自社ビルを構えた。そして、自宅もすぐ近くのマンションになったから、大阪市北区西天満という大都會の「町内会」を通じた近所づきあいを体験するようになった。年1回の総会や花見会などに出席すればそれなりに楽しいうえ、長老たちから聞くまちの歴史などは大いに勉強になるもの。しかし問題は、夜間居住人口の減少と役員の高齢化によって町内会への参加者が年々減少していること。単に西天満に事務所を構えているだけで、町会費を払ったり、町会の行事に参加することに消極的なのはある意味仕方ないが、それでは都心部におけるまちなりのあり方はどうなるの……？ この映画には、近所づきあいという視点からの面白いシーンが2つある。1つは、散歩に出る恭平が、家の前を掃除していた横山家のすぐ向かいに住む西沢ふさ（加藤治子）と交わす会話。「今日も暑いですねえ」に始まるこのちょっとした会話は、今ドキの日本では失われてしまったもの……？ 2つ目は、子供たちに出前を届けにきた、松寿司の店長小松健太郎（寺島進）と交わされる、

とし子やちなみとの会話。松寿司の先代が認知症となっているためその看病が大変らしいが、そんなプライベートな情報交換を含むホンネの会話も、今ドキの近所づきあいでは失われてしまったもの……？



© 2008 「歩いても 歩いても」製作委員会

それから数年後……？

この映画は、純平の命日となった横山家の夏の1日（2日？）を描くもの。映画冒頭は昼食を準備するシーンだったよう。また、この日のメインは全員がそろった昼食にあったよう。それは、良多一家は一泊するつもりで来ていたが、片岡一家は夕食を食べないで帰るため。したがって、映画中盤以降は片岡家が抜けた後の、うなぎの出前による夕食風景と、その後の入浴やいくつかの語り合いのシーンから構成されることになる。その中で見えるさまざまな家族の風景をとくと味わいたいものだ。

そして、一夜明けた翌日は、あの太っちょがお参りにくるシーン。きっと横山家では毎年夏になるとこんな1日がくり返されてきたのだろう。しかし、そんな中で、ふと人間が思うことはみんな同じ。つまりそれは、こんな風に家族が集まる夏の1日の風景はいつまで続くのだろうか、ということだ。実家に戻れば無用な議論をすることが多くなるので、できれば帰りたくないというのが良多の本音だが、今年はそうもいかず一泊泊まりとなってしまった。しかし、来年は？ 再来年は？

是枝監督はそんな視線のもと静かなラストシーンを用意しているのだから注目！ さて、長男純平亡き後、あんなに頼りなかった（？）横山家の次男良多の数年後は……？

2008(平成20)年4月10日記